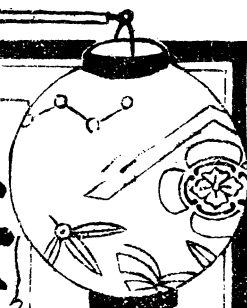


大風俗
仕懸文庫

分六寸三	コ	ヨ	紙	表
分三寸五	テ	夕		
寸	三	コ	ヨ	粹文本
分二寸四	テ	夕		



京傳著

仕懸文庫

大磯廊中宛景
 鎌倉遊子傳記
 葛唐丸粹



自叙 四

夫頼朝公乃御願會より大ハ
獨大儀の賤し形り虎お將次
初として許多は妓女をもと
あそぶ常客多し通ひ官
榊原の儀ハ宵宿里れ矢筈
と連へ小村の慢も左右の眞
成多し接禮来る言辭乃衛足
時鼓が疳積も煙笛の皿を
挫ぐ羽織工藤あれも羽織
歌妓あり只多し人男子等
下色ハ抗義の妓女衆あり

或恍惚く近江の實情アヤ
ハ情で首の義理づくあお沙
息の猪牙舟ハ範頼公を罵る
の言と神と花一切遊ハ
對面の三方のく扱れ外ハ
少くも多し妓女も寸間狩場
の切多あり。於是又切丸と
とて魂と紛失し赤木仙と
ともと家次鞘も斬り盡満
江公と痛き人や鬼王の
忠言却る可ぬは是鑑
倉田の妖境りて星月夜

乃井の深く戒且惡所と

北條時方寛政三郎

祐安辛亥の荒次郎

鬼王の正月和田醜の

三日目

京傳醉中誌



自序

夫頼朝公の御願會より。大は獨大礮の脚ひなり。虎少將を初として。許多の妓女色をあらそひ。萬客爰に通ひ乍。梶原か倭は。宵宿りの矢筈を違へ。小林が慢は。左右の指をかき撫。祐成が二日酔の衛足。時致が疳積は煙管の皿を挫く。羽織工藤あれば。羽織歌妓あり。兄弟の男子等あれば。梳籠の妓女衆あり。或は恍惚で近江の實情あり。八幡で首の義理つくあり。沙息の猪牙舟に範頼公は。鳴子の音に神を飛ばし。一切遊びは對面の三方のぞく扱れ。外へ出て居る妓女をば。寸間狩場の切手あり。於是友切丸とともに魂を紛失し。赤木作とともに家を韜はしる。豈満江心を痛さるんや。鬼王が忠言。却て耳に逆ふ。是鎌倉時世の妖境にして。星月夜の井の深く戒且惡所ぞかし。

北條時方寛政三郎
祐安辛亥の荒次郎
鬼王の正月和田醜の
三日目

京傳醉中誌 印

仕懸文庫目錄

第一回

大磯往來遊おほいそわらいのゆうげ戲船せん中之談ちうのだん

第二回

朝夷あし名祐なすけ成醉なりゑひ風流ふうりう忘還わするかへるとを

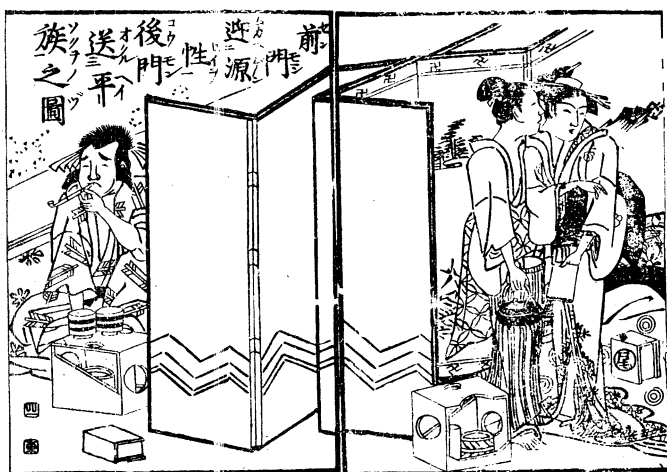
第三回

舞鶴屋傳まひづるや二教てんざがけう訓惜くんあはれむを妓を

第四回

梶原誇かはらがくはこうの口罵くしるを蝶を

妓爲きためにときわが二時あやまつしうしんを致あやまつしうしんを謬を終身を



風俗仕懸文庫 山東京傳著

第一回

東山に妓を携へ漢土の驕者も。いまだ
綵帛舗の出番のちよつきり遊び。酒肆
の枝藏がへりのたのしき事を知るべか
らず。爰に後鳥羽院の御宇文治建久の
昔。鎌倉の巽にあたつて。一ツの女肆
あり。大礪と名づく。爰に來りては。
陶朱倚頓が富も。桂林の一枝のぞく。
こゝに居ては。昭君楊妃が美も。崑山
の片玉にひとしく。黄金の塵塚。鬱氣
の捨場。潮氣盛の場所にして。顛卷安
座の失禮も。所からとて目にたゞず。
サツサおせのの鄭聲。じつに雅樂を
みだし。忠臣もまよひ。孝子もうかれ。
老たるとなく。若きとなく。權介とな

く。八兵衛となく。やたらに行むしや
うに通ひ。振らるゝあれば。照らさる
ゝあり。或は討或は被り。陸を行もの
は稀に。舟を行者多し。ゆく舟のいさ
みある風情。かへる舟のおもひあるや
うす。猪牙舟の柏餅は。苦舟のまんち
うを過り。舟棧橋へつけば。心とんで
先へ上り。おちかいうちと港板をつき
出せば。神あとのこる。船頭たつと
まれて君のぞく。客人茶にされて臣の
ぞく。羽織といふは衣服にあらず。新子
とよぶは。もち米にあらず。昨日の娘
分は。今日のかみさんと變じ。羽をり
化して子どもとなるなどとは。いまだ
礼記の月令にもみす。初會をもらひ。
ぬすみを賣。跡をつけて待あれば。な

をして鼻をあかする有。宵とまりの客
のをちつきがほ。朝なをしのねむたき
顔。四ツあけのしつばり。昼あそびの
いさみある。妓のぬは獨立の草書のど
くよめす。蜜言は蠻夷の風調にして解
す。呼れて來り。おくられてかへり。
いやがられてのぼせるあれば。すかれ
てすゝまぬもあり。うはきの風は鼻の
さをふき。實情の雨は膝のあたりへ
ふる。きやくは千差万別。妓の臨氣應
變。實に是平康の盛事なるぞかし。○
こゝに相州平塚の宿。御所五郎丸。半ざらしのあい
花水橋の上を通る武家。さびのぶつきき
ばをり。十ばん仕立のお馬やひらの馬のりばかま。
大小のこしらへに氣をつくれば刀はつがもなく長
く。てつのふちがしら。鉄のもく目つばに。うでぬき
の付たやつ。つかは腰のへをのぞりびねり。鞘はに
かはだ。い。身はげんも。三分だきぐらと思
はれ。わきざしはくつとみじかく。竹のこがたとい
ふやつ。もつとみづか。さやは四分のどらうがね
入。ばく刀こじりのとき出し。みは長刀ごしらへの
間打など。おもはれ。小づかはするがのべうち。
下緒は具足のおとし糸をうったやつ。ぶつききのう
しろへ。弱をさし。てつのくさり。矢立をこしへつ
け。髪を風をしとりといふやつ。もつとも小びた

ふあり。手に花色のめりやすをかけ。菅のふ。三
四の小さむら。い。しらくも頭。野郎。黒きねのひ
とへ。羽織。おとなの着るやうなやつを肩てあげを
し。大小もはかまふ相態に大きく。竹の子笠をか
ぶりはり弓をしやうぶかはぞめの袋へ入。ゆがけ
袋とつ。袋とを一所にゆひつけてかつ。か
かた手にべんとうをさげる。○たいたい。大いそ三めん
堂の椿古かへり。
五郎丸コレ風でまとをふき
とられるな。氣をつけろ。小侍ハイく
モシききほどのお矢は。とう／＼見えま
せなんだか。五郎丸。三面堂も場所
い。草がおほみから。悪くすると
矢をしやられる。コレあすは又由比が
はまで見せ馬が有が。ふりはせまいか。
小侍どふござりませうか。モシあの佐々
木さまはよふおてなされます。五郎丸
何てうしあたりだ。ゆるみがある。
トコしかア、此橋で上足を騎てみたい。
トつ袖にてしやつきばり。花水橋の上をゆきす
る。○折から秋のはじめつきたにて。ざんしよあれ
ば。川にはすくみ舟。長たな舟。をしおく川の青砥
んと。さきまの舟ゆきかふ中に。なめり川の青砥
屋の舟とみへ。一そうのやね舟。すこし南けな
ば。しんつのはなをひらきにのる。船中一人のきや

は。小林の朝ひな。とは三十ぐらい。ゆうき結の
ひとへの。船の。小もんの羽織
ぬいで。そばにをく。これはかねて
大いその通なり。今一人の客は。
としは廿三四。もぐじまの越後に白じゆばん。
黒るの羽織。しぶ地紙の扇をもつ。これは青襦きや
くにて。大いそはまだ。
通なり。今一人は。朝三郎。とてそがの十郎が
かみなり。こしら
へを推量。
千郎。朝さん。今花水橋のう
へを通つた侍は。かのやつがつとめて
ゐた屋敷の次男だせ。朝ひな。アウなんだ
か。こうせへに武ばつたなりだのう。
みねへ。檜垣もこうしてみると。大
なもんじやアねへか。朝三郎。此おや船に
は。大ぶんいみとはがありやすねへ。
茶わんなどのこわれた事を。はじたと
いひやす。わつちやア一度へッてみ
やした。朝おちい。此ごろはなはとど
ふだの。長な。
つどくから。にがしはでいけやせん。
朝さうだらうヲ、けふもよつぽど南が
でうきたはへ。でへふうねりがある。
波の立。けふはいつかだのヲ。十二日だ

の。コウ二四八。ウ、ハツ八ぶだから。
てうど今上るせへちうだ。のりにくい
筈だ。しほどきにくはしきは。十郎アレ。鶴が
大塚つうの情なり。
うなざをとつた。朝ボン。朝こうせへ
なうなざだ。アレもふ呑んでしまつた。
又しりから出た。ト船はしんつへわたる。
橋をくぐる。わかふか
らもちよき一
艘こきくる。
い。さがりがあつたナ。
向の船頭。タイおちさん。どけへい。く。
繩町だ。向の船しづかに往きねへ。
トすれ。
又アノやらうも。でへぶ。鯉ぶりが
よくなつた。又むかふから。鎌倉は引丁の舟。
たなものとみへる。客。おくられ
てくる。女がいしや二人。女郎一人。茶屋の娘ぶき
がつき。やね舟のすたれを上げさせへしとさわき
る。朝。こけが。心學をならやアしめへし。
むしやうに茶わんをた。くやつサ。十
こりやアできだ。朝まんざらでねへく
びだの。おちい。鳥羽瀬だの。又アイつ
いていくナ。鳥羽瀬の釣屋の娘ぶん
サ。ト新市葉のまへへ来る。龜子。イタヌ。おま
屋あたりのこゝにいて。
へしゆうもちわたしはかへ天じよつ

板かしらとは。せばの板かしらだといふ事。大い
その通阿也。此舟はさのまいそきもせねば。やうや
う右に白ふねいなり。左にしゆみの^④祐なりさ
四てん川岸をみて。ゆきするなり。^⑤船頭おあぶ
ん。コレ右りが白船いなり。左がしみの
四天河岸。すなはちあの堂がしみの
四天だ。こつちらの磯井といふ。のれ
んのかゝつてある藏づくりが。縄町の
てやいの遣り繰りをする七ツやだ。
トかうしやくする所へ。又あとより二人せんどうの
ちよき。奉公人らしきやつをのせ。いそぎ来る。
又そのあとより。おなじく二人船どうにて。そ
こぎきたる。跡より來りし舟の客。何か船頭にさ
やきしが。しみの四天がしへ舟をつけ。一人の船頭
あがり。一さんにかける。さきの船はもはやいなり
川岸あたりま。^⑥コレ朝ひなさん。今あの舟
はなせあすこへつけて。船頭を上ケた
のう。^⑦よくある事だが。あれは大い
そあそびのきもといふ所さ。鳥羽瀬の
客とみへるが。あのりくつは。先へい
つた舟の客と。跡からきた舟の客と。
同じ女郎をならんで買といふやつさ。
あとからきたやつは。先のやつを見知
つてゐるから。船頭をおかをかけさせ

て。さきへ口をきりにやつたのさ。先
のやつは跡のやつを見しらぬから。う
か／＼いつたが。なんぼ急いでいつて
も。モウ後手になるといふやつさ。跡の
舟はいくらおそくいつても。先へ口を
きつておきやア。此方のものさ。聞へ
やしたか。其又口をきるといふ事は。
大いその通言で青樓なら。しまひにや
ると。をなじとだ。あとから來たやつ
は。如才のねへやつサ。^⑧かんしん／＼
其道によつて實しだ。こいらはもつと
もな理屈だ。^⑨宇治川といふものだね。
トはなしのうち。よう／＼^⑩朝大ぶにぎや
舟は船頭のかし機橋へつく。こいつア
だはへ。ゐるを。かぞへてみて。
出てゐるもしれねへはへ。
どもは。かす少なきゆへ。舟の高で大きい客のたか
も知れ。子どものきれるとを早くしるは。大いそ通
也。^⑪こゝにむきすな胡瓜がながれ
付てゐる。^⑫そりやア河童へやるとい

つてながしたのさ。^⑬ト久はさきへ上り。ちや
屋へしらせに行所へ。
おくりとみへ。客と子供と。娘はんつきを。あと
より下女すべりふた物を井へ入。ちよくと共ひひろ
ぶたへ。のせ。かた手に大きな銚子。^⑭船頭
をさげ来る。船頭うけ取舟へ入る。^⑮船頭
なうござります。幸清吉。もう何時
だ。^⑯八ツがちつとまはりやしだらう。
ト客も子ども舟へる。娘ぶんのり。銚子の口
をみよしの方へむける。これは舟がゆれでも。酒
のこぼれぬやうにとの心づ。^⑰かへり。モシへ
出ていなさいやすヨ。^⑱朝いま／＼しい。
さうだらう／＼。サア祐なりさん。上ッ
ねへ。^⑲マア團三。さきへあがらつし。
團そんなら。おさきへでやしやう。^⑳
ヲ、コレ／＼。こいつア大さわぎだ。ア、
氣味がわりい。コレ早くとつてくれ。襟
へ舟虫がはいこんだ。^㉑それ。とりや
した。ト三人舟を上る。朝ひなは桐のまきの下駄
をばく。祐なりはわきざしをたばき。三
人小べん。雪よしの貨漕團をかたにかけ。はま本
をする。^㉒からおくりの時。借りて來たたばこば
んを片手わたくしは此かり物を返して。
おあとから參りやす。^㉓朝早く來たがい

第二回

なるみ絞のゆかたに。
黒どんすの帯。紺飛白。

つてござへやす。お頼ん申やす。たのめんまうやす。はい。
雪よしにおひきがなじみの客がきてゐるゆへかり
にきたたり。しかれども此間こゝから雪よしへ
かりにいつたよき義理をわくした事があるゆ
へ。そのいしゆにて持があがぜ。わざとつてをく
の。ふきアイ今さう申やしたが。一座に
ちつと揉があるから。すんだら上ヶ申
やしやう。マア行つて來なせへ。雪よし女
そんなら。お早くおたのん申やす。
トそとへ。馬鹿／＼しい。したく待せた。また
もめがあるも氣がつゑ。小言。ふき
き。氣がつゑも。氣がつゑ。す
かねへ女つちやアねへよ。ト云朝
十願三人來ふきヤヤ／＼朝比奈さん。よ
うお出なせへしたね。どなたもアおあ
がんなさへし。娘おたきよくお出なせ
へした。お魔物をあげてくんな。ふき
九本ぐらいの客だ。朝はしごを上りか
てうして。お客だ。朝はしごを
ば。しかけぶんど四十五。三みそ
箱五十六あるゆへ。胸ときつき。今日ほこり

やアごうせへに販^{ばい}かだ。しかけ文庫といふは。子どもの着更

を入てもたせて来る文庫也。大いそにて新物をし
かけといふ事人のしる所なり。尤しかけぶんこを
持せる事は。繩^ひゆへに此野子の。朝十 團三人
行い。丁にかぎる。

い。たきおつつけ涼^{すずし}い所があきますか
ら。マアこゝへ。ふき茶をぼんに三ツ モシ此
のせて来り。

ごろはお遠くしうござりやしたね
へ。廻いそがしいわな。大分にぎやか
だの。たき此ごろは相應でござります。

いねさかづき持 朝さん。ようお出なせ
した。朝おとつい雪の下の堀井町でみ

かけたせ。いねあいサ。かけにめへり
やした。といふち。いろい。区羽織を着こゝ
る出しもの出る。

は風のへつりさうもねへ座敷だの。モシ
舟におたばこ入がござりやした。と出

ふきおちさん。一ツ飲みなさんねへか。

サアとなたもお一ッお上んなされやし。
ト少しさかづきまはる所へこの内て。おひて来
のさばく女だんごあだなをとりし。
朝さん。よういらつしやりました。モシ

へどう致しやしやうねへ。お鶴さんは

おわるふござりやすよ。はま本に出て
いなせへすとさ。此方にでも出てゐな

せへすりやア。貰ひきものう。ふき
さうサ。朝そりやア覺悟のめへだ。こ

ゝの二人をはたらいてくだせへ。区お
ふたりはお初會だよ。朝いゝゆかただ。

本國寺ぎれのかたぎな。ひで此ごろお
客がそろひにお出しなせへした。けふ

はもう生憎だねへ。今わつちらがうち
から。美しのが二三人あいて歸りや

したが。すぐに出やした。マアはたらい
て見やしやう。とゆきさう。朝まちな

そしてこうとな。おつと稻吉ト魚介を
よんでくんねへ。ふき魚介さんは成田

へたちなせへしたよ。朝そんなら鬼丈
をよんでくだせへ。ひでおつさんはた

しか雪よしの出番のしうへ出てゐなは
るのう。マア寄場へきくにやりやしや

う。と此うち二ツ三ツ讀し。いね寄場へいつ
る所へはとなく。

て板をみて來やしたが。いゝ子どもし

はさつばりさ。やう／＼はたらいて。
おだんさんに。おとらさんが來なせへ

す。おとらさんといふナア。新子でござ
へすが。かはいらしい子サ。朝さん。

おつるさんをかりてめへらうと思ひや
したが。おつつけむかひだと申やすか

ら。あとをつけておきやした。そして
おつるさんはござりやせん。鬼丈さん

と。稻吉さんは。今きなせへす。いつ
そ暑いヨ。とおびのうしろへこした壬生狂言の

を仰。朝諸事おいねでなけりやア。わか
らねへといふもんだ。いね又あんなだ

んごをおつせへす。ついぞねへ。区お
きさんはどうした。いねいな村が崎の

鯛門屋へめへりやした。朝出ばんか。

いねいゝへ。お店のしじやアござりや
せん。といふ所へ。子ども出かゝり。隙子のや

ではないかと。いねもし。どなたもお出
念のためなり。

なせへし。ト二人座敷へ出る。おとはまだと

きとはかみ座し座のしやべつなきゆへ。さきへ

出るをいやがり。いつても歳のゆかぬ者が。さきへ

たつて見給へ。氣お座 十七ばかり。紫稻のひ

ひのあづまもやうの振袖。もん所は五三の帯のすが

ぬひの下二ひの板じめのかさねとせんさい寺ちやど

んすの帯。髪はふくらびんのかた。天神べつか

うの造り物をさす。郷丁だけ二人がよろし。

だん 廿ばかり。ひねつてたんだ縮緬のやまとが

きの單物のもん所結構。これはとめ袖。縮緬

の長じゆばん。桶上の黒じゆすの帯。ひとへ結んで

さげ。髪はぐるりおとしのつり舟。さし物も餘程ふ

めるなり。惜いとにひき肩。此ごろ仕掛がはいつ

たとみへて。どれもりつばなり。○おさだまりの

き。○女三みせん箱もち来る。○たいし。大いそに

て三みせんばこの紋を小口へ付る事は。

宵場にてはやく見わかるためなり。

へ方。ちつと此方へよんなせへ。朝お

ちい。この隣の格子づくりの内はな

んだ。△アリア男がいしやの寄場さ。

通いふ所へ。鬼丈。東丈。一座のかほを。づらコレ

の宮のまゝでござります。

の名代 朝さうだつてか。通團三さん。

よく來なはへしたの。團三 此ごろは

本藏といふまくはどふでござりやす。

通次おり。虚無僧に 通そりよを言てくん

なさんな。朝おきやアがれ。稻吉鬼丈さ

ん。おめへの髪は夏どんか。とんだい

い。○ 郷丁の手やいみな此。鬼はれたか。

稻フウやるせがねへ。朝さん。此間御が

岡の山の今本でおうはさを申しまし

た。朝稻むらが崎の白軒が所へ。此ご

ろにいかな。此間にいろくおもむきあり。い

き。撥をうしろの帯へさす。○折からきやく

二。人あがり。となり座敷へはいる。一人は

や小藤太 四十四五ぐらい。さんとめ縮緬の單物の

ぬのとを少しもんの單羽織。縮緬の帯

よき酒みせのかみ出し

とみへふ。一人は 八幡屋三郎兵衛 廿七八

な男。くりむめの木綿のひとと物。花色ぐん内ぶと

りの帯。花もらせんの前垂を疊んで肩にかけ。釘木

を髪へさす。鎌倉ゆきあひ川の酒店五軒店あたりの

り。

三郎兵衛 は座敷のとの間へ。いげぞんぎ

に尻をまくつて膝をかけてゐる。

小藤太はたつてゐる所へ。女ひき茶を持て三郎

ひきついでねへ。悪じやれをしなせへ

すな。三郎やかましいは。ひきけふは

藏だしかへ。小藤太さん。どこで三郎

さんとおちやひなすつたへ。小藤翁そ

ばかり一ツしよにきた。大ぶ賑かだの。

ひきこゝともに五ツ座敷サ。けふは誰を

よびなはる。三郎ちぶ屋のおしげを

きいてみてくりや。小藤げい者をだれ

ぞ。ひき太夫しか。はをりしかへ。三郎

つゝ茶碗をむかふへこ。はをりサ。同く

ならおみんが。ひきあれはい。が。

マア板をみてきやしやう。小藤太さんの

も。だれぞ美しい所を見つろつてき

やしやう。此ごろはこんなに賑かな日

と。又ぐつとひまな日があるから。う

つかりと買こみもならず。こんなだと

手こづりやす。やうぶに茶屋でかひこんでを

り事な **三郎** むかふにかゝつてゐるあ
さづま舟の額をみて。 なんだ。

此類の繪は急ばしをかぶつて舟につ
てるの。 様の舟まんちうださう

だ。 **ひき** すきな事をいふなへます

と行。 **娘** 八重さかづき持 **三郎** けふはわ

づかの駄で。大きに手間をとつた。う

はつきのあるやつはみんなたして。香

つきのやつはなをしやへやつた。 うは

とは酒のへつた事。かつき ちつともいくやつ

は。鍋町か。すじけへか来たたら。門前

にたゝかふとおもひやす。 もんぜんとは。

に賣るといふ。たゝかふとは手をたゝかふとき

といふ事。 これみな酒店の通言也。

にこう。爰の内へ北條のおやかたがく

るじやアねへか。 **八重** わななどもへはお

出なせへせん。 **三郎** そんなら化粧坂へ

ばかりいくだらう。 **小藤** サウ三ぶ公。舟

の來たにしちやア。でへぶたけへのう。

三郎 したじのかはいた所だから。やす

くは賣りやすめへ。なんぞたしなすつ

たか。たしなすつたかとは。 **小藤** 雁新の手

めへをちつとばかり。 **三郎** どうたしな

すつた。 **小藤** 三ぶがそで。判の分さ。

トゆびを。 **三郎** かつこうもんだ。八重モシ

お一ッおあがんさいまし。 **三郎** 一ッ

て飲み。舌うこいつアあんまりあめへ。 **目**

か。 **へ** だらう。 **花** があらば。ちつ

とわつてくんねへ。したが三河へ水を

かめちやアあやまるせ。三河ものへ水をと

は。 飲めるゆへにかくいふ。すいをかめると

なな事をいつたつて。通じるものか。

ひき きたり。 **モシ** へ三ぶさん。夢の戸か

らお京さんがあいて來たが。おめへの

氣が知れねへから。つつといてきやし

た。どうしやうね。 **三郎** イヤゝあいつ

をよんじやア。跡がむつかしい。 **ひき**

そんなら變げへて來にやアならねへ。

ト又ゆく〇つてをくとは。きにくるうちを外へ

出ぬやうに。ちよつと待せてをく事也。大いそはた

ばこふくのあいだを争ふ△こなたの座 **おとら**

ゆへ。此やうなとあり。 **おとら**

おたん 着かへて **とら** はくり茶がへし的小

これは床着と道中着と兩方へ用ゐしやうなり二人

ともかけ香のひをも。むねの所で十文字にとり。

鼻紙入をみす紙にてまき。帯のまへへ。たて二はき

む。 **通次** イヨはやごしらへ。きついても

の。 は芝居の詞。 **とら** といぞね

へ。 **女** モシどなたもちとあちらへ。 **鬼主**

なるほど。ナトぶんまはしの道具がはり

といふ所がよからう。トみなへたつ所へ。

おつ もあいて來り。すてせりふあつて。

ト又むかふざしきへ床がまはり。

鬼一面 いな吉さやうなら。御さげんよう。 **十**

くらう。 **鬼** 青砥屋の久公。

つりがたまつたらちつと海へつき合ッ

せへ。 **久** 此ごろはそんな元氣はなしさ。

通うそをつくせ。 **トみな** へ下へゆく。〇つ

なり。ためて置てとり。それで海などへゆくなり。

海といふはつるがおか八まんのみかふ海手にあ

る四六みせなり。○又男がいしやは。床がまはると。じきニかれども。はをりむかひのかゝるまで。下に待つてゐるなり。○大いそのならひとて。八疊じきへ三人わりど。屏風とくへせなかあはせ。細丁はやぐを茶屋から出すゆへ。あまりよろしからず。細丁のほうは藝者をこるばすといふたてゆへに。夜具もちや屋からい出すなり。しきがみをとちつた味噌せんべいを見るやうな麻の蒲團に。比翼まぐらなり。女は三人のはをりを下へもち行めいしくに食ゆか。朝祐成さんモウねたか。十何たをきせる。なせこねへ。夜具がわりいねへ。朝こは茶屋から床がでるからわするし。鳥羽瀬なんざ。女郎がもつてくるからみんないたじめなどき。それだから夜具つゝみのはしに付いでる札を見ると。こはだか床だといふもしれるよ。ナントまあこうとこへはいつた所は。むしあつじやアねへか。極樂の塩風呂がこんならう。國コリヤアできた。ころへ。おとら。来り。はながみをと。祐なりが煙管をかきて。おびの間からうらばたんの龜甲がたの煙草入をだし。うすまひのたばこをすい

付てだす。女。つゝ茶わんに茶をくんで。二ツちよいとゆびでつまみ来り。たばこ盆の上へおびをときもへきのいとさなだの下じめばかりにてねる。一たいこの法は初會なぞには。大きなおびもとくぬといふがさだめなよししけれも取組によ。おとら。モシへ。何かあじにじれつてへねへ。十。おめへじれつてへを。何處ぞではきけへてきたか。おとら。茶ばつかひなはる。十。おめへも歳はいくめへが如才はねへ。おとら。ついぞねへ。おめへがたのやうな革じやアごせせん。おめし。おめし。かはとはかわはをり。おめし。十。てこんな事から。やみつくものよ。おとら。わたいらがやうなもので。マアどふして及びもねへと。猿猴の月とやら。十。でいぶおめへはものしりだ。おとら。おだんとの間中となりは朝ひなとおつるはなじみだけ。別して。趣あれども。事しげうれば累す。折ふしむかふ座敷には上方ものとみへ。ものずきな客むしやうにあなたを聞きたがるやうすにて。密コレごふく店の客の穴を。少しふてきかしやいの。船頭。ごふく店の衆の

遊山にでるのを。出番と申やすが。出ばんのあたるのは。正二六八の月さ。仲間の通言にやア。つけのばせになる事をつけ衆になると申やす。又それをしやれていふときは。淺黄のもい明松坂緋共申やす。床のまはる事を。大の字とも。又ランチとも申やす。金一分の金を。ナル升一。とも又シンヲ一とも。酒のをへル。よい女郎の事を。ト一。わるい女郎をくはをり。げいしやの事を。かはと申やす。まだいろ／＼穴もござりやすが。くはしくは申されやせん。密コリヤゑらい穴じやわい。ハハハハ。トはむだうちよほど時う。朝。十。朝。三人おきてここを出つりければ。朝。十。朝。三人のあひかたゆく。朝。コウ祐成さん。日ぐれまで居ちやアわりいか。十。よくもねへが。おめへがいらばどふするもんだ。朝。モシ。氣にいらざア。あの子をさげて外のをよびねへ。十。何サ。まんざらでもねへはな。朝。さうはにらんだて。コウ。三。て

めへもおつう本よみをしたな。狂言がおさまつたとみへるせへ。團何サ。わつちやア。トローとやらかしやした。そんな事をいつておくんせへすな。わつちが身のうへでござりやす。身の上言。通。十朝比奈さん。こゝじやア。男がいしやはいくらだ。やつぱりおなじとか。朝何男がいしやは一分サ。十鳥羽瀬のがいしやも。こゝへよばれるかへ。朝ッリヤ鳥羽瀬をこゝへも。こゝのを鳥羽瀬へもよばれるのサ。其かはり一ツで二ツになるのサ。そしてこゝじやア子ども。羽をり。といふが鳥羽瀬じやアやつぱり。女郎。がいしやとなへるによ。それなまだ脇にねへ。妙な事がある。鳥羽瀬のみへきなぞじやア。子ども屋へくる女かみゆひの外ニ。襟ばかりこしらへに来る女がある。それで渡世になるのサ。そいつをゑりのおばさんにつけておくわな。十一チ變つ

たとだの。トはなしのと。久来るもしへ。どふなさりやす。朝もう一きりゐるつもりだ。久それもよふござりやしやう。團稻きもなをしてやらつせへ。ト小ぢおぢい。おつるもくびは相應だが。一ツかふな棒だせ。かるやきをうしは煮にしたやうな女郎だ。ちつと又かしをけへやう。久御めへのやうな。物飽をしなさるお客は。みた事がねへ。團久いどうけをいはつしやる。三人ゆかたに着かへ。おつるは木綿ちぢみの編のゆかた。おたんは鳥羽瀬の八わたやから染だしたと。おとは鯛丸仕入のしぐれいなばせ紋のゆかた。おとは小もんのゆかた。いなもきたり。なをしぐかなど出る。此客折く料理番にはづむゆへ。だしものは氣をつけて出すやうす。又さへかへつて賑かになり。さかづきまはり。娘ぶんや。女入かはり。立かはり来れども。事しげければ。いなモシ朝さん。此ごろに芝居へつれてお出なせへせんか。つるホンニわたいらも行きてへよ。ト帯へ手を

きつひ此さといふ所へ女奴をもつてきて。いな吉との婦也。にわたすいな吉ひらいて見る。みすの紙へ。べにて。團何かおもしろさうなと書たぬなり。ね。いなアにけうでい分の所からきたのサ。つるこれノにりがが。いなさうサ。朝しかたでするふちやうも古いノ。よせノ。ト此うち。おとら。おとらは初會だけだまりる。朝コウおぢい。此ごろは鳥羽瀬はどうだ。久あつちも賑か。ゆふべもお客をつれていきやしたが。舟宿部屋までふさがつて。ざしがなくつてけへりやした。團コウ青砥屋。煙がごうせへい。一ツのみねへ。といふ所へ。おひてあさいなさん。おめへさんはこれ組だから。煮茶といふ所をさせやした。サアこれを一ツおとんなせへやし。ト高杯に越後やの松かせせんべい。こはく餅。きぬたまきなど。積あはせたるを出す。朝こいつアありがてへ。ゑちごやの松風煎餅ときちア。竹むらのもなかの月といふもんだ。つる朝が耳へロモシ今日

はどうぞ。まはしにちかづきになつて
おくんなせへし。朝しやうち／＼。

第三回

戀と情の中裏とて大いそ通にしられし
は。うら屋住みの小路にして。妓家軒を
つらねつゝ。棟をならべて櫛の齒を。挽
くにひとしき人出入。片ときたへぬ駒
下路の。音は寄場にかしましき。夫が
中にも鶴といふ。字を鏤したる竹簾か
けたるは。舞鶴屋傳三といふ妓家な
り。内に「居候」ぞどうこをみがいてゐる。
とみへ。しちりんで中ふく「子供」
を煎じてゐる。こちらには「子魚」
を煎じてゐる。こちらには「金魚鉢の水を
折からかまふ朝い」長谷觀六「來
な切通の判人。おやかたは
御やどか。」「居候アイおられます。
傳三「通俗といふ傳をよくかけて。ひる
さん。御出。觀とときにいふ奉公人があ
りやすから來やした。突出したがとを
りはよし。身のしねへなざアごうせい

いゝ女だ。とをりとは鼻すじの事。身のしね
へとは風俗の事。皆此道の詞也。
「此節ほうこう人もほしいが。わりい
足でもついちやアイねへか。」「觀何サ。
根をよくたゞして來やした。いさくさ
のねへのさ。ホンニ此頃一人となすつ
たじやアねへか。おや判かへ。よび出
し判はだれを入れたつた。傳二人リ
取たが。聞きねへ。ひとりとは四五日つ
かふと。ゐんばらむしをやみだす。ひ
とりは髪どやでひつこんでゐるはな。
つきだしの子どもはゐんばらむしといふをよく病
むもの也。ふのりを煎じて飲ませるなり。かみと
やと云は。とやにかゝりて。そして其奉公人は
髪の水のぬける事也。
どの位のものだ。觀五年で。金五まい
ぐらゐといふあたりサ。マア明日あた
りみなせへ。傳あしたは勘定日だ。觀
おしい奉公人だから。早くとらせてへ。
傳仕切あけにせすに。親判をとをすだ
らうの。觀ばんばやの忠太がほうこう
人だ。なんなら親からそへ證文をと

つてあげやしやう。相だんが出來たら。
かげをばちつと付てくんなせへ。とは
かげにて儲け傳そりやアどうともしや
う。觀そんならおめへ。見てからむな
ぐらの五兩もかしてくんなせへ。手金
の事を。むらぐらと。傳それともよく洗つ
てみてくんねへ。觀氣遣しなせへす
な。洗ひかたは如才はねへわたしたか
ら。ふみ玉なんざアつかやアしやせん
はな。ト觀六はかへる。〇か玉とはあといふ
くさのあるほうこう人の事なり。〇折ふ
しかいへ。二かいより手。傳おてう。ち
の子供。おてう。水く下る。傳おてう。ち
よつと來や。ト奥の障子をたてき。外のとで
もねへが。手まへがアノ曾我の五郎とや
らいふ客をよぶ事は。とうにきいてゐ
るから。せいでよけりやア。五軒の茶
屋へとはつて。あはせぬ事も知つて
ゐるが。外の子どもにやアきさされね
へと。長家一ばんあきねへをよくし
てくれた手まへだから。今まで大目に

見てゐたが。此ごろはさしをついたり

ねたりすると茶屋の評判もわるく。コレ

黒木の客もきれたげなの。きけばその

時宗とやらいふ客も内をかぶつてゐる

そうだが。ハテすへん。コウア、トおもふ

心があらば。もふ一年もしんぼうして。

をれにちつと息をさしてくれろ。おれ

も男だ。さうすれア半年や一年の年季

はくれてもやる。さうして手めへが地

めへになり。其男とひとつになつてか

せぎやア。又おれも世話をして。かゝ

への一人もするやうにしてやる。手ま

へも知つてのとをり。おれも長屋で相

應に口もきく玉をあづかつて。土地と

ころの世話もしてゐれば。内の子供に

万一のとでもありやア。長屋中へお

れが顔がたゝねへナ。きこへたか。合

點がいづつたか。トふく海もどきのお談義

しおてうさん。鶴が岡屋から。口がつる最中のおもてから。

ゝりました。

第四回

〔女〕ひでまへだれて手を 朝比奈さんモウお歸ふきながら

りなりますかへ。〔朝〕此ごろに來やしや

う。〔みな〕さやうなら。どなたも御機

嫌よう。〔十〕ちつと風が。〔圖〕でやしたね。

朝おちい。のつきれやうかの。〔次〕氣づ

けへはござりやせん。〔朝〕〔十〕〔圖〕はしごを

女刀かけぐるみ持てきて見せろ。祐なりわきざしを

見分けてさす。奥から番附を賣た札のついでる履物

を持てきてなす。娘ぶんど。〔つるが〕おボヲウン

女など川岸までおくつてゆく。〔か八まん〕

これより夜分の体は折から曾我の五郎時

じまりきやうに御ら。〔宗と云きやく來ん〕〔女〕ヤ

五郎さん。〔女〕サアお上んなせへましな。

〔五郎〕表のくとりだ。いゝか。聞てみてく

んねへ。〔女〕わつちらが内に出ていなせ

へす。〔五〕そんなら。あとをつけてお

いてくだせへ。表の畠山屋に友だちが

きてゐるから。其うち付やつて來やう。

〔女〕モシマアそれじやア。おてうさんの前

へ惡ふござりやす。〔五〕いゝやうにいつ

ておいて下せへ。直に行てくらア。

トいへども女ども承知せず。〔五〕は二かいへあ

むりにひきずりあげる。〔五〕たつた今

朝いなヤ祐なりがかへつて。まだ出しものや

三みせん箱の。とりちらしてある座敷へはい。〔五〕

そんなら。今のうち八もんじやの湯へ

はいつて。汗を流してこよう。〔女〕そ

かたつけ。はきよしなせへナ。そんな事を

いつて。又表へ行きなはるだらう。性

わるをしなはると。おてうさんに言

けやすよ。〔五〕は。かねて。御籠やのかへお

も度く來りし也。こよいは心のもめる事あつて來

たりしゆへ。はたへそれと氣だれまじと思ひ。わ

ざと元氣にてゐ。〔おてう〕は。女が知らせしゆへ。座

ざととほどなく。〔おてう〕は。歌をあけて。ちよつと

來り。心まちをしてゐたに。なせ遅か

つた。〔五〕しよけへか。〔てう〕さうさ。貰

つてもいゝが。もふ今にむけへだから。羽織衆でもよんでゐてくんねへ。どけ

へもいきなさんなよ。コウおふさどん。
憚りだかの。たばこ紙を。おばあに
そういつて。とりよせてくんねへ。ご
しやうだにヨ。ト又ゆく。長く他のさしに
なり。また寄席におばあといふ。△其た座敷に
ありて。子供のせはをくなり。△は。客はかへつ
たが。まだむかいのか。おきつソレ。わたいが
てへこに出て。しかもそのばん。雪よし
で一座アしたアな。おたぬう、それ。／＼。
ホンニあの扇が谷の末廣屋にしんぞう
おろしが有さうだが。おめへどうする。
祝義をやらざアなるめへ。ナル升一で
よからうかの。出ばんの詞を覚えて。二分
狂言ではおそれるのう。おきつわたいら
ア。此ごろは大ひつ天で。さし物もみ
んなやつてしまつたしきだ。殺されて
もねへ。おたぬうさアねへ。ホンニおいら
ア。もう明日ア。さはり用事をつけて
引こもう。これじやア出られねへ。
さはりをふかく見る。おきつなるほど奉公人根

性とはよく言たもんだよ。わたいらも
かへでいた時にやア。むしやうに引
こんだが。ちめへになつたら。一日も
よけへ出てへ。おたぬよく氣は微塵もね
への。むすめぶん。おき何へこむ氣が
ちがつたさうだ。ツウくうれしい心い
きだ。ト何か廊下をすてせり
ふをいひくきたる。おきつさん。
ちよつと後をむいて見せな。おめへの
髪はとんだすいたかつかふだよ。誰が
ゆふ。おりたさんか。おきつ何。わたいら
が内へは。おつよさんが來やすまな。
おきおつよさんは。たしか表へもいひ
に行くのう。鳥羽瀬のおよめさんもよ
くゆふよ。おきつはんにかへ。おたぬモシへ。
おむじさんはお客がきたかねへ。おき
何サ。ねすみに出てゐなはらアな。ふう
なるゆへ。あい。引。おきつはんにかへて行。おね
供。その客のくるまを。おたぬ此ごろ隣へ大瀧
からでいしにきてゐる子は。とんだ夫

きな顔をするによ。どこぞじやアへこ
むだらう。おきつウ。ヨ。わたいらア。まだ
一座アしねへが。長家中でそういわア
な。それでもよくうるさうだよ。だが
まはすのう。おたぬ大兵衛さんがまはさ
アな。ホンニそりやアさうと。あしたア
雪の下へぬをださうにヨ。おきつ一しよ
に駄づかひにもたしてやらうはな。
ト一人は下へ行。おきつ町では駄づかひと。こなたの
いふを。此とちては駄づかひト云。座敷ニは。
おきつその五郎へがきてゐるうへならず。心の
うちにいる。と苦勞のすじあれば。何か
そは。心おちつかず。たび。／＼らうかへ出。又敷
屋をくいつて出さうにする。此客きはひはだの半通
とみ。名は。梶原源太。その櫛を。コウどけへ行
くのだ。おきつちよつと手水にいつてめ
へりやす。梶なんだ。こいつアとんだ
尿瓶じやアねへか。さきつから度々
出るが。わりやア雪隠へとうもろこし
の食ひかけでも忘れて來たのか。おきつ
おめへ。さうあじに思つてくんははる

事アごせへせん。さつき二三度出たナア
あの。〔圃〕やかましいわへ。トおきより。大あぐら。〇三四
ほん洗つたおの川しほの貸ゆかたのつんつら短みじか
やつを。腕うでまくりして。竹口かしがはつたけいらばりの
煙管たばこで。薄紅梅といふきんて。一分二朱ぐらきい
する煙草を。一ツぶくんでよいとはたき。
これへ。わりやアおりやうば初午はつごの晩の
狸をみるやうに。氣はつかりあじにさ
せやアがるか。ひつてんな客とみて惡
しくするのか。但シかまくら沖きよくでとれ
た。通り者を喰つた事がなくつて。おそ
れをなすのか知らねへが。近江の湖水
へ目だかをはなしたやうに。あつけに
とられる生息子や。夕顔ゆがはの暑氣しよきあたり
といふ。色の青い出番でばんのやつらをと
扱ふとは。あてがちがふぞ。鯛門屋の芋
のにへたもしらねへでいゝかとおもつ
て。宵から當次が内のたばこばんより
高いつらをしやアがるか。大かた内じ
やア。出しッかしこをしてこしらへたきらす
に鯉こいの汗の中へ。一ト袋三文のとうが

らしをふりかけて。小びんから汗をか
いてくらうだらう。〔テウ〕モシへ。まあ静しず
かにしておくんせへやし。わつちが
悪かアあやまりやしやう。餘りでこせ
へす。怪しからねへ。〔圃〕なんだ。けしか
らねへ。けしが辛からけりやアナ。唐辛からや。
山葵わさびはナ。かぶを賣つて裏店うらだなへ引ッこ
むは。これ。われやアまあ何屋から出る
奉公人だ。たゞし名まへ出居衆で。亭
主をすぐすのか。ウ、きこへたア。さつ
きからたび／＼廊下へ出るが。なんだ
な客が来たから。こつちのあくのをま
たせてをくのか。經師屋きやうしやうの達摩だまか。宗十
郎が似顔にがはじやアねへが。横目で睨にらんで
も。遣るもんじやアねへはへ。是から
一ばん胸むねわるで。おれがけへきり根く
らべだ。マアさう思つて。むかふの野
郎やうにも往生やうじやうさせ身上しんじやうへ細こを付て引すつ
てきてから。待てゐろといえ。かうい
つちやアはんのこつたが。お袋おふくろのまた

ぐらからぎやつといつて。鎌倉風かまくらふうのひ
より下駄げだをはいてから。さかわ川の猪
牙船きやふねで鶴が岡つるがおかの八まんさまへ宮参みやまゐりを
して。稻村いんむらがさきのざるそばと。いて
う屋の鰻うなぎでそだち。たまごの四角を枕
にして。女郎やうらうの實をふとんにしき。晦
日の月の屏風びやうぶをたて。十二夕じふにゆふの場所か
ら七夕五分の場所かけて。隅すみからすみ
へ寢かげへりをうち。正月の初勘定はつじやうから
買はじめ。一年中の客帳きやくちやうは。をれが表
徳とくでよごさせ。大いそ一とをりの夢は
みつゝして。春はるにやア舟梁ふねりやうの魂たまがいつ
てる梶原かじはらさまだ。どこの出居衆勘定は
一ツうつていくらッ。子供がつかふ
床屋どやの損料そんりやうは。どのくらい床でいく
らする。といふとも。茶屋ちやのさんばしの
鳴子なりこの札ふだに。どこの内には何流なにりゆうで。何
屋やと書てあるとまで。づつうにのみこ
んでゐるのだはへ。なんだの。かたの
と。上手をつかやアいゝかと思つて。

すつばんのうち首をみるやうに。餘り
びく／＼しやアがるな。トだん／＼聲が
てう采れかへり。言葉をやらせて。いろ／＼と和
めてゐるところへ。下から此客をのせてきた舟宿
や。女どもが来て。よつてたかつて立ごかしにして
やう／＼歸してしまふ。あとにはひつそりとなり。
はじめて外の座敷のわらひ座もきこへる。おてう
は。すぐには座敷の方へ。田なをり／＼して出る。

〔五〕とんだ毒氣をふくばけ物も。來れば
来るもんだぞ。やう／＼まるめてけへ
しやした。〔五〕アノ客は大ぶしつたかぶ
りをならべたナア。どこぞじやアいはう
と思つて。内でふくしてをくだらう。
なんのとはねへ。石葛鉢で鯨を飼ふ
やうな太平樂だ。それにてめへのかけ
引が氣がきかねへから。こゝできみて
ゐても。日よけの穴から狂言をみるや
うでじれつてへ。〔下〕ホンニサ此頃どや
をしまつた新子かなんぞのやうに。こ
ゝのうちの前へもかつこうが惡ふごせ
へす。縁喜なをしに。あをつきりをつ

いでくんせへし。〔五〕よせへ。又癪を
おこすだらう。〔下〕一ツぐらゐはい、
わな。〔女〕ふき。來。時宗さん。おちやづ
けはへ。〔五〕モリこんやは喰ふめへよ。
折から下。〔安〕ひて。モシへ大だかやへ。ちよきを
一艘こせへさせてくんせへ。馬入川
のしほだめまだよ。そして起番はひ
とりでい。今夜はとまりがすけな
いから。トいふ聲がきこへる。これ四つあけの
かしなり。こゝのちや屋でいへ出入の舟宿なり。又
おきばんといふは北國でいへぬずのばんの事な
り。△かくてとこ。〔五〕てう。ちへはいる。〔下〕は
がまはり。〔五〕てう。ちへはいる。〔下〕は
十八ばかり。洗ひ髪をおとしげの島田に臺でゆ
ひ。つげの小さな櫛をちよいとつちそうにさし。
前案の所へ銀の短いかんざしをさし。三兩ぐら
もするべつ。この物を二本ほどさす。おしろいなしの
素顔。いしやは素肌にすき屋ちよみ。花いろじゆ
すの帯。白ちりの下おび。たゞしは着かへたなり
也。こいつは五日勘定に三十も。〔五〕もまだ錢はいた
うりこめるといふ奉公人なり。〔下〕つて若く。にが
みのある色男。こしらへは藍微塵のめんちりのゆか
た。無地のこんはかたの帯。下おびは紺ちりめん

り。
〔下〕はとこの中にはらへに★なり。じにん
好みの玉のきれてこしらへた小なみ
入の中から。黒ぬりにしたうめぼれ鏡を出してみな
がら。かんざしで前髪のほつれをなしてゐる。
〔五〕コレてめへ。指の輪はうらみだせ。も
うやめにしろ。おとなげねへ。紋所は
なんだ。ドレみせろ。〔下〕い。う。うつち
やッておきなよ。モシこりう踏みなさん
なよ。守りだよ。〔五〕なんの守りだ。〔下〕
鳥羽瀬のむかふの秋葉さんから出る災
難よけのまもりさ。ト云所へ。まひづるや
てよこしたるを。薬やひき。持て。〔下〕コリヤア。
くわんのまゝ。下女。〔五〕は。おてうが薬を煎じ
てよこしたるを。薬やひき。持て。〔下〕コリヤア。
おひさどん。憚だよ。とてもの事に。
もひとつ頼れてくん。おらが内のお
ひらさんがあいてけへるならの。ちよ
つとこへ顔をださしてくんねへナ。
ひきアイさう申やしやう。ト。〔五〕瘡の
くすりか。〔下〕知りやせん。〔五〕枇杷葉
湯だな。てめへののむにやア。い。薬だ。
〔下〕にでさ。ほどな。おひら。來。おてうさ

ん。なんだへ。てう おめへうらみなもんだ。兄弟ぶんのやうでもねへ。胃ッから五郎さんがきてゐらアナ。ひら ラヤわつちやア。けへしき知らなんだ。五郎さんよく來なつたの。五 でへぶ今夜はまじめだの。てう ちよつと耳をだしな。ト おひらに。おめへうちへいつたらの。ミ おれがくし箱の上の引だしに櫛があるからの。あれを深本へもたしてやつての。二兩かりてのたばこ入の中へいれて。たばこのつらでよこしてくんねへ。又客帳を出しちらかしておいてくんなんさんなよ。如才はあるめへか。小ゆびに悟られねへやうによ。ひら 承知さ。五郎さんおさらばへ。五 ライもふいくのか。ト ひらは。てう 煙草をすいつへてなし。手をたゞきさうにして思ひだし。紙入のなかからほたる火うちを出してうち。すいつける。五 開羅あたりの女郎を見やうに。そんなものをもつなへ。やすくッて悪い

せ。てう 何客のめへで出すもんか。五 コウこのころは仕懸がはいつたの。てう さうサ。茶屋からたのみでしかけがはいつたから。地めへてやいは。しゆかいまけがするとつて。さがつてわきへ出るものもあるよ。五 あじなもんで。しかけがはいると賑かになるナア。ト しゃはなしの所へ。かの金子入の。てう ウ、よたばこ入を。子ぢよくもち來ん。五 しノ。おひらさんに御世話でござしたといつてくりや。そつとよ。ト ちよくは。モシ五郎さん。さつきの話しのものをこゝへ入ておくによ。ト 時宗が紙入の。五 ウ、どふもそいつが無くつちやア。これこれが落着しねへ。てう もしたらぞア。あしたにも又さう言つてよこしねへ。ト いふうち。外の座敷もひけて。二かいはいしんとしめる。表ざしきのあたりにて。羽をりのおゆまが。五 メリヤス万ぎく。胃はまちわびわくせきとふけてみれどもまださ。ごとの。ト あたりに。五 晝はどのぬをさ

だめてみたであらう。てう くわしく見やしたよ。今日もけふとて旦那さんが。いやと言れぬもつともな意見はきけど。わつちが身の上も何をかくさう。べつここの救がへり。仕懸文庫が輕くなつて。此さし物も着たものも。みな損料のつがふ物。おまへの身のうへといへば。だんノのあのわち。はてどうするもんでござへす。此からだをつき出して。五 主人のぎりも。てう おまへにみかへて。五 そんなら晝のぬのとをりに。てう にげやしやう。五 コリヤ。

追加

前に許多の小冊出で。此大磯の地に於て。妓客の情至り盡せり。雖然コンコ、リキコ、マカリキの時代にして。はや十年の物換星移。よくいふものの上も。いつしか着ふるして。わづかに吸物碗の袋とはなる。古今人情かはらざれど。風のうつり俗のかはるは。息の強ひ吹矢のとき。昨夜の鬢さしの型に鱗がこどく。流行のはやきは。都て烟花のならばせなり。故に今再び此地を穿鑿して。十二錢目の筆のはつみに。三錢目の胸のうははをくはへ。合て以て一部の書となす。猶予が穿のいたらざる所は。此地の博子のくはしきを待而已。

美^{うつく}味^{あじ}と考^{かんが}へ玉^{たま}へて。くさ^{くさ}り^りの^の人^{ひと}ハ一^{いつ}翫^{くわん}の^の事^{こと}して危^{あやう}く不^ふ悔^{かい}。
京^{きやう}傳^{でん}嘗^{かつて}好^{この}色^{しき}を^を淫^{いん}蕩^{たう}と著^{しやく}述^{しゆ}。
そ^その^の以^{もつ}て^ても。實^{じつ}ハ前^{まへ}ニ美^{うつく}味^{あじ}。
あ^あの^のこ^こと^と述^{しゆ}々^々。後^{あと}。
毒^{どく}あ^ある^るこ^こを^を示^しし。戒^{かい}と^と垂^ち。

河豚羹を不食愚鹵あり。くふ癡呆あり。くはぬ愚昧は美味を不知。くふ素痴は有毒を
しらず。毒あるをしらずして。くらふ人は
論に不足。美味をしらずして。くはざる人
は一概にして危し。不佞京傳。嘗好色淫蕩
を著述すといへども。實は前に美味あるこ
とを述て。後に毒あることを示し。戒を垂
がため也。不如美味を知り毒をしつて恐愼
には。河豚はくひたし命は惜しとは。豈此
境を悟したる。君子の言といはんや。孔夫
子衛國の煮賣家を過りて曰ことあり。吾未

うまめ也。不如美味とあり。毒
成志以て忍性ある。河牝も
くあう。命に惜しと。室山
境と悟し。君子乃言く

いんや。孔夫子衛國の煮
家と過を曰くあり。吾末

徳と好む。吹肚臭と好む。す
る外と。屋吏。傾城
傾城とある。鐵炮汁の極
小あり。何ぞや
三月うらなふ事



徳を好む者。吹肚魚を好む如くする者をみず
と。嗟夫ホンニ。傾國傾城ものは。此鐵
炮汁の勢ひにあらすして。何ぞや。みづか
ら後にしるす。

京
傳